

かわもとかほ

かわら版

家畜衛生広報 (R8 Vol. 2)

令和8年9月発行

川本家畜保健衛生所（西部農林水産振興センター 川本家畜衛生部）

〒696-8510 邑智郡川本町大字川本 265-3

TEL (0855) 72-9805 FAX (0855) 72-9811



鳥インフルエンザ対策はお早めに！

国内における、高病原性鳥インフルエンザの発生・摘発状況は下表に示すとおりで、早い年では9月に野鳥で摘発されています。

今いちど飼養衛生管理基準を見直して、ウイルスが侵入・まん延する前にしっかりと対策を行い、農場へのウイルスの侵入を防ぎましょう！

		R2 シーズン	R3 シーズン	R4 シーズン	R5 シーズン	R6 シーズン	R7 シーズン
野鳥	初発	10 月 24 日	11 月 8 日	9 月 25 日	10 月 4 日	9 月 30 日	10 月 15 日
	最終確認	3 月 3 日	5 月 14 日	4 月 20 日	4 月 30 日	6 月 17 日	5 月 22 日
家きん	初発	11 月 5 日	11 月 10 日	10 月 28 日	11 月 25 日	10 月 17 日	10 月 22 日
	最終確認	3 月 13 日	5 月 14 日	4 月 7 日	4 月 29 日	2 月 1 日	4 月 22 日

飼養衛生管理基準については、中央畜産会がガイドブックを発行しており、農林水産省のホームページからダウンロードできます。

外国語版もありますので、従業員の方にも広く読んでもらいましょう！（金丸）

※農林水産省 HP URL：

https://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/katiku_yobo/k_shiyou/



※牛・豚・馬のガイドブックもあります！



アフリカ豚熱防疫演習を実施しました

アフリカ豚熱（以下 ASF）が昨年 10 月、発生地域と陸路を持たない台湾の養豚場にて初確認されました。同じく島しょ地域である日本への侵入の危険性を改めて認識しました。

こうした状況を受け川本家畜保健衛生所は、9 月 2 日にタイガー株式会社、邑智郡森林組合美郷支所及び美郷町の協力を受け

「アフリカ豚熱防疫演習」を行いました。

演習内容は、美郷町内の一地点に ASF で死亡したイノシシを発見したとの想定で、発見域外への感染個体の散逸防止を目的とした、防護柵と電気柵の設置について参加者全員で実施しました。

設置資材は軽く、個人的には身体的負担は感じませんでした。



電気柵の設置



空撮映像をモニターで観察

また、ドローンの実演として、空撮により、林野地形の形状や付近の野生動物生息状況の把握を行いました。さらに、ドローンに搭載された赤外線カメラの撮影事例も紹介され、その解像度の高さから、農場の野生動物対策への応用が可能と感じました。

演習には麻布大学の江口先生も参加され、フィールドでの野生イノシシの行動痕跡を共に観察する機会があり、実に興味深いものでした。

韓国では今年に入り、飼養豚や野生イノシシで ASF の発生が増大し、ジビエの加工や取引は全面禁止となっています。我が国への ASF の侵入は、食肉流通を脅かし、日本固有のジビエ文化に大きな影響を与えるものであります。未だ治療法も確立されず、豚熱のように有効なワクチンも開発されない現状では、侵入阻止のみが防除手段です。

今回の演習で、万が一の行動様式は周知できましたが、農場におかれましては引き続き飼養衛生管理基準の遵守をお願いいたします。（土江）



高校・大学生が和牛の飼養・調教に取り組んでいます

令和 9 年 8 月、北海道で第 13 回全国和牛能力共進会（全共）が開催されます。和牛の改良成果を競う全共には、農業教育を通じた和牛への理解醸成と、将来の担い手育成を目的とした“特別区”が設けられています。

川本家保管内からは、矢上高校と農林大学校がエントリーします。両校の生徒たちは、出品候補となる若雌牛の飼養管理に加え、全共出品を見据えた調教にも熱心に取り組んでいます。県機関としては、和牛登録協会や JA などと一緒に巡回指導を行い、飼養管理技術の向上をサポートしています。現時点では、両校合わせて 7 頭の出品候補牛がおりますが、そのうち 6 頭が発育判定 5 となるなど、ハイレベルな競争が繰り広げられています。



巡回指導の様子



9 月 14 日には管内 2 校に出雲農林高校を加えた 3 校合同の調教研修会が開催され、学校の垣根を越えて技術を学び合い、交流を深めました。

研修では、調教の基本となる立ち姿勢をつくるための“頭上げの綱打ち”や、左旋回を行うための“はせ綱（頬打ち）”を実践。生徒たちは講師先生のまねをしながら、「ばっ！」「しっ！」と元気よく声を出し、綱を操っていました。



講師による調教の実演

今後も、全共への挑戦を通じて、和牛の魅力を発信するとともに、次世代の和牛生産を担う人材の育成につなげていきます。（小川）